

アーキテクト 「みえ」

34・35号

JAPAN
INSTITUTE OF
ARCHITECTS
2024



公益社団法人
日本建築家協会

特集

三重の建物 保存・利活用

日本建築家協会 三重地域会
活動報告 2022-2023 年度



アーキテクト “みえ”

Contents
JAPAN INSTITUTE OF ARCHITECTS
34・35号
2024

三重の建築散歩 三重県立熊野古道センター

尾鷲ヒノキで実現した無柱の木造大空間 (尾鷲市)

設計監理：(株) 建築研究所アーキビジョン 戸尾任宏
施工：交流棟 奥村・東建興業JV
研究取蔵棟 (株) セルフ舎建設
建築主：三重県
構造：交流棟・展示棟 木造 (等断面集積木材構造)
研究取蔵棟 鉄筋コンクリート造 (一部鉄骨造)
竣工：2007年 (平成19年)

三重県立熊野古道センターは平成16年(2004)、「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界遺産に登録された熊野古道の魅力を発信する拠点として、その3年後に開館した。

熊野古道とともに、周辺の歴史や文化、自然を紹介し、あわせて地域の活動や交流の場としての機能も持ち、年間10万人以上の来館者が訪れている。

参詣道の石畳をモチーフにした石段を登っていくと、尾鷲ヒノキで建てられたシンメトリーな建物が迎えてくれる。4m余りも飛び出した軒先と、それを支える舟肘木が圧巻だ。単調になりがちな組壁に設えられたスリットが心地よい。

力強い軒先組梁の水平性と組壁の垂直性が微妙なバランスで風景に溶け込んでいる。

アプローチを振り返ると、この建物が尾鷲湾を見下ろし、熊野古道のシンボリックルートの通る「馬越峠」を正面に眺めるロケーションに建てられたことがわかる。建設地は、かつて棚田だった。

プロポーサルにより選ばれた設計者のコンセプトはこうである。「美しい山々と海を望む敷地の環境と景観が一体となった施設。松・杉を産出する東紀州の地場産材を使用することで、危機的な状況の林業の活性化を図る。

さらには、柱・梁・壁の構造要素全てに、135mm角の一般流通規格材である尾鷲ヒノキ無垢材を組み合わせることで、組柱・組梁・組壁として構成し、無柱の大空間を実現する木造建築」

設計者は、古代から構造材が意匠材としても使われてきた日本の建築の原点に着目。尾鷲ヒノキの赤身を帯びた色艶と目の詰まった年輪や強度は、構造、意匠の両特性を併せ持つことから、基本設計の段階で実物大試験体による構造実験を実施し、無柱でも十分な強度となる確証を得ていた。

また、地場産材の使用と林業の活性化に向けて6,549本の用材全てのトレーサビリティが行われたことは特筆すべきであろう。

それが行われたことの証が、交流棟中央の間仕切り組壁にしっかりと残されており、それぞれの木に産地を示すプレートが貼られている。

尾鷲ヒノキの一般流通規格材を組み合わせることで、これだけの建築が実現したことは、林業の今後を考える上で、とても意義深い。

熊野古道センターは平成24年、第13回公共建築賞(文化施設部門)に選定された。(宮原良雄)

表2 三重の建築散歩 熊野古道センター

01 巻頭のことば 森本 雅史
出口 基樹

02 特集 三重の保存・利活用

04 旧上野市庁舎 ————— 滝井 利彰
伊賀市

06 海の博物館 ————— 出口 基樹
鳥羽市

08 賓日館 ————— 高瀬 元秀
伊勢市

10 旧カネボウ綿糸松阪工場 <松阪市文化財センター> ——— 伊藤 達也
松阪市

12 旧諸戸清六郎 <六華苑> ————— 奥野 美樹
桑名市

14 旧山田郵便局電話分室 ————— 高橋 徹
伊勢市

17 全国での建物利活用の例 ————— 服部 昌也

18 建築文化講演会2023 ————— 村林 桂
講師：永山 祐子 「建築というきっかけ」

19 建築文化講演会2024 ————— 久安 典之
講師：長坂 常 「半建築」

20 活動報告 2022～2023年度

24 三重会員名簿／三重法人協力会員名簿

表3 編集後記

三重の建物 保存・利活用

全国で価値ある近代建築の解体が進められており、建物の保存の是非が話題となっています。三重県内の当初の所有者からの移管・用途変更のあった建物について調べてみました

日本建築家協会（JIA） 三重地域会 会長 **森本 雅史**

JIA 三重では、2年ごとに「アーキテクトみえ」を発刊し活動報告と特集記事を掲載しています。新型コロナウイルス感染症が落ち着き、私たちの活動も平常に戻りつつあります。一度止まった活動を再開し次世代にバトンを渡すための2年間となるよう、継続事業（建築文化講演会・建築ウォッチング・アーキテクトみえ発刊）と建築学生の学びの場づくりを軸とした活動、会員研修を丁寧に開催しました。

さて34・35号の特集は、「三重の建物保存・利活用」です。文化的な価値のある近現代建築を保存し活用する動きが全国でも広がっていますが、維持管理のコストや耐震・機能的な問題、または建築関係者と市民の価値観との乖離から保存利用が進まない事例も多くあります。古代ローマの建築家ウィトルウィウスは、著書「建築について」の中で建築の3条件として「用・強・美」を挙げています。ところが近年わかってきたこととして建築家の横文彦は、「用・強・美」のうち、美と普段訳されている Venustas は、「Beauty 美」ともう一つ「Delight 喜び」という意味があるのではないかと

と語っています。そこにこれからの建築のヒントがあるような気がします。

わたしが思う喜びを生み出す建築とは、わくわくするような体験や人々の記憶に残る体験をやさしく包み込む空間であったり、建築が主張しない素地のような空間です。人間は調子のよい時ばかりではありません。音楽を聴いてその時代の出来事を思い出すように、建築を訪れることで楽しい日々を思い出すような、美しいだけでなく、人や場所によりそう建築・空間をつくることも、愛着を感じる建築につながると思います。その想いや愛着こそが保存利活用にとって大切に部分だとこの特集からも感じられました。

これから生まれる建築が、価値あるものとなるためにも、建築の喜びを共有できるような人々を増やすことが、重要だと思います。JIA の活動がその一助となればと思います。建築家といっしょにいい建築をつくり、残していきましょう。今回の特集が建築のこれからの考えるきっかけになれば幸いです。

三重地域会 副会長 **出口 基樹**

今号の特集である「三重の建物保存・利活用」の取材を通じ、文化財の在り方に触れ、そのなかで改めて日本文化の独自性を考える機会を得ました。先日山本理顕氏のプリツカー賞受賞の報が舞い込んできましたが、日本人の受賞は9人目で、世界で最も多い受賞国だそうです。この事象に日本文化が寄与していないとは言えないはず。独自性を他国には無いものと捉えたと、日本文化の独自性とは「型」の存在ではないかと思えます。一般的には伝統芸能や武道、茶道などにおける決まった動きのことを指しますが、現代の生活や学びや仕事においても型は存在しており、日本人である我々は多少なりとも型を身に付けているのではないのでしょうか。歌舞伎では型を習得するまでは、決められた動きしか許されないそうです。型を習得した役者が、その型を破って演技することで、観客を魅

了することを型破りといい、型を習得していない役者が、同じことをしても型無しになるだけ。なるほど、建築にも同じことが言えるのではないのでしょうか。先人が培った意匠や構法そして空間や間が綿々と受け継がれ、型になり、それを習得した先に人々を魅了する建築が存在しうるとするならば、さもありません。しかし一方で型には、「型にはまる」や「型どおり」などの負の作用も見受けられます。特に自分らしさや多様性を尊重する現代においては、敬遠されるべきものなのかも知れません。さらには、やり過ぎると全体主義に陥るかも知れません。したがって、時代に応じた程よいさじ加減が必要にはなりますが、我々は今一度「型」に従い、愚直に行方を繰り返す必要があるのかも知れません。その先に歴史に残るであろう優れた建築、さらには文化を創り出す展望が開けるのかも知れません。



旧上野市庁舎

滝井 利彰

所在地 伊賀市上野丸之内 116

建物概要 鉄筋コンクリート造 地下2階/地上1階 延面積 6,070.95㎡ 1964年竣工

思い出

平成 21 年 (2009) 8 月。鎌倉の「神奈川県立近代美術館」のギャラリーで私は一枚のスケッチ絵に見入っていた。坂倉準三が描いた、伊賀上野の城山風景を背景にその麓に建ち並ぶ低層の近代建築群。この年の 11 月には坂倉建築研究所と地元の市民団体や建築関係者の多大な協力で 2 週間にわたる「坂倉準三展・伊賀上野」とシンポジウムを開催する。



そして今

それから 14 年余り、今その建築には足場が生まれシートが被され、敷地周囲には仮囲いがされている。保存改修工事が始まった。



令和 6 年 (2024) 2 月撮影

経過

平成 16 年 (2004)、「平成の大合併」により上野市を中心に周辺 5 町村を含めた「伊賀市」が誕生、市域が広がって伊賀市庁舎のあり方の議論が始まる。検討委員会が組織され、その結論は現庁舎の存続も視野に入れた現在位置を前提とするということになった。しかし、平成 21 年 (2009) 6 月、当時の市長が現在地での建替えに言及したことで、世論は 2 分され、保存活用を望む建築

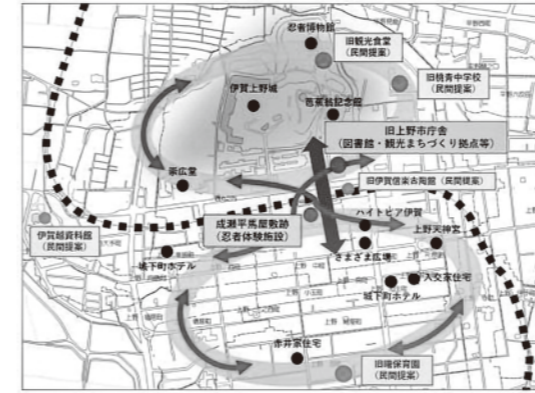
関係団体や建替えを望む各種団体からの要望書が数多く提出されることになる。冒頭の「思い出」はこの頃の出来事。しかし翌年、市長が建替えを明言、合わせて市議会が新市庁舎建設予算を認めたことで、平成 23 年 (2011) には建設事業が動き出す。新庁舎の設計作業を終え、平成 24 年 (2012) 夏に敷地内の中央公民館と市庁舎北庁舎が解体された。一方で市庁舎南庁舎 (現旧上野市庁舎) は建設工事中の仮庁舎として利用するために解体されずに残った。

この年秋の市長選挙。結果新市長が誕生し、市庁舎南庁舎は保存改修し市民図書館として活用するとの方向性が示された。しかし新しい市庁舎を現位置に建設すべしとの意見も根強く、住民投票条例の制定を求める運動が起こる。ところが投票率が過半数に達せず住民投票は無効となった。その後、紆余曲折を辿りながら平成 26 年 (2014) 秋、新市庁舎は郊外の三重県伊賀庁舎の隣に新築することを市議会で可決、平成 31 年 (2019) 新庁舎が完成する。それ以降旧庁舎は「空き家」状態となった。

この間も、旧上野市庁舎の改修関係予算の可否を巡って市長と市議会との軋轢が続く中、要望書やシンポジウム、ボランティアでの外壁洗浄などのパフォーマンスでも保存改修を訴える。他方では、ドコモモ・ジャパンから「日本におけるモダン・ムーブメントの建築」に選定され、日本イコモス国内委員会からは城下町の伝統と近代建築の調和が評価され「伊賀上野の文化的景観」として「日本の 20 世紀遺産 20 選」に選定された。さらに市文化財保護審議会の答申から 2 年越しで市文化財に指定される。そしてやっと決着がついたのは、新市長 3 期目の令和 2 年 (2020) 暮れの事である。

しかし時すでに遅く国庫補助を得ての単独の改修事業を行うことは出来なくなっていた。そこで市と市議会 (この時市議会は全会一致で賛成) は民間活力の導入により事業を進める事を決断をする。ようやく市と市議会の意見が統一されたのだ。それは旧市庁舎単独の事業としてではなく、市内観光を目的とした「にぎわい忍者回廊」を整備するもので、旧市庁舎の保存活用の他、武家屋敷跡の成瀬平馬長屋門 (市指定文化財) の敷地等を利用し、市内の回遊路を創出しようとする計画である。これに向けて市は事業パートナーを公募する。

忍者回廊イメージ図



そして令和 4 年 (2022) 9 月、PFI 事業として正式に特別目的会社「伊賀市にぎわいパートナーズ」と契約を締結することになる。このプロジェクトには整備費の他に運営費や維持管理費なども含まれ合わせると市が 20 年間に投資する総額は約 64 億 2 千万と見積もられている。

「忍者体験施設」は屋内で様々なフィジカル体験ができ簡易宿泊所等も併設する。この施設の整備費は約 4 億 7700 万円で、既に昨年暮れに工事着手されている。開業は令和 6 年 (2024) 12 月の予定。



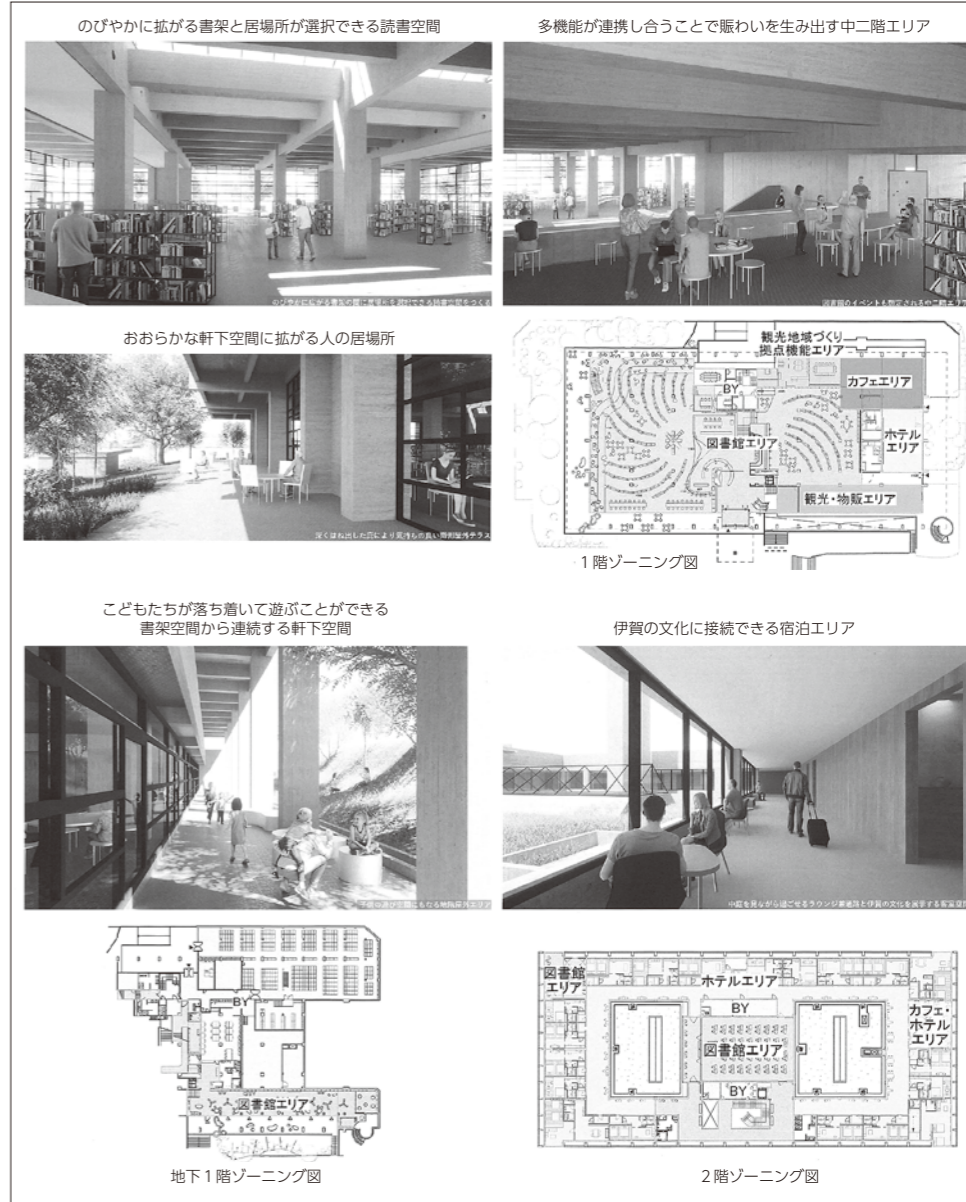
鉄骨造 地上 4 階 延面積 123.73㎡
忍者体験施設完成予想図

旧上野市庁舎の改修については、当初に提案された基本設計では市民交流型の図書館を中心に観光ガイド施設等の複合施設であったが、PFI 事業者からは図書館等の他に宿泊施設を併設する提案となった。整備費は約 27 億 9400 万円、宿泊施設の開業は令和 7 年 4 月、図書館の開館は 1 年遅れの令和 8 年 4 月の予定である。

地下 1 階地上 2 階の建築で、地下と 1 階はスキップフロア。地下は閉架書庫や児童開架と事務室、1 階は一般開架と観光エリアの他カフェ等、2 階はホテル宿泊室と議場跡に学習・集会室という構成である。

平成 5 年 (2023) 前半には事業者主催で市民向け現地見学会や図書館のあり方ワークショップなどが開催され、子供向けのスペースやトイレの位置、書庫のあり方などが議論された。他方、旧上野市庁舎は市の指定文化財であり「保存活用計画」によって、保存管理の基本方針が定められ「保存部分」「保全部分」「その他の部分」

市民説明会資料より (2023.6.18)



と部位等を含めてきめ細かく規定されており、プランニングはもとより、耐震補強計画や設備計画との整合も課題となった。

設計を担当するのは「伊賀市にぎわいパートナー」のマル・アーキテクチャー。事業主や設計者がこれらの難問をどの様に解決するのか、保存活動や文化財指定にも関わった立場からは心配でもあり楽しみでもある。

追記

昭和 35 年 (1960) から昭和 41 年 (1966) の 6 年間に坂倉準三設計による「上野市公民館」「崇広中学校校舎」「白鳳公園レストハウス」「三重県上野分庁舎 (上野市庁舎北庁舎)」「上野市庁舎 (南庁舎)」「西小学校体育館」が次々建設されたが、今残るのは「白鳳公園レストハウス」「上野市庁舎 (南庁舎)」「西小学校体育館」の 3 建築のみである。

※ [PFI (private finance initiative) 事業とは民間資金と経営ノウハウを活用して公共施設の設計・建設、運営を行う事業]



海の博物館 <鳥羽市立海の博物館> 出口 基樹

所在地 鳥羽市浦村町大吉 1731-68
建物概要 木造およびプレキャストコンクリート造 地上2階 面積 3,924㎡ 1992年竣工

「海の博物館」である。言わずと知れた建築家「内藤廣」の出世作であり、建築学会作品賞を受賞した建築である。まずは、沿革をおさらいしたい。2017年より鳥羽市立として運営されているが、それ以前は現在の指定管理者である（公財）東海水産科学協会を母体とする私立の博物館として前館長である石原義剛氏が立ち上げ、運営されていた。この協会は石原前館長の父であり衆議院議員も務めた石原円吉氏により漁業振興と漁村青年教育を目的として設立されたもので、時代とともに水産関係の知識の普及や資料の保存、水産資源の保護、海洋汚染の防止に活動は拡大していく。そんな背景の中、博物館の創設は円吉氏からの提案でスタートする。早稲田大学を卒業し在京のテレビ局に勤務していた義剛氏は帰郷し開館準備委員会を発足、1971年に鳥羽市小浜で開館する。設計は建築家「原広司」。博物館の企画に参加していた知人から原を紹介されたい。残された写真や模型を見ると、屋外階段とボックスが幾重にも重なる様は、全く規模は違うがヤマトインターナショナル本社ビルを想起させる。また、原からはグラフィックデザイナーの栗津潔氏を紹介され、後に展示パネルの制作を依頼することになる。（原は栗津邸の設計をしている）さて博物館は完成したが、収蔵品が少なかったこと、運営が不慣れであったこともあり来館者は少なく、成功したとは言い難い状況であった。開館当初に開催した講演会で知りあった民俗学者の宮本常一氏からも、まずは収蔵品を50,000点集めるよう説かれ、学芸員を率いて収蔵品を収集しながら、新しい研究施設と収蔵庫の計画を進めることにな

る。その計画地として選ばれたのが、現在の浦村の地であり、もとは西武グループである（株）西洋環境開発が周辺一帯で構想を描いた志摩芸術村開発構想の一部地であったらしい。そのあたりの繋がりも内藤が設計を担う事になった一因であるようだが、内藤の建築への姿勢に義剛氏は大変感銘を受けたようである。長期に渡り少しづつ施設全体を完成させるという、手間が掛かり根気が必要な計画に大変な熱量を持ち続け、設計を完遂するという離れ業をやったのけた。こうして義剛氏の想いが詰まった建築が始まった。まずは研究棟が、続いて収蔵庫が1989年に鹿島建設と地元の大西種蔵建設のジョイントベンチャーで竣工。当初の計画は実はここまでで、研究と保存しかせず、観せる施設にするつもりはなかったらしい。しかし計画を進める途中で翻意し、展示棟もつくろうとなったそうである。そして建築は続き、1992年



旧海の博物館 鳥羽市小浜



同模型

に展示棟が竣工、こちらは大西種蔵建設のみの施工である。同年7月に計画を開始した1985年から7年を経て開館。この7年、実は前出の収蔵品収集とその文化財登録（1985年までにも約7,000点を登録している）などを行う期間でもあったらしく、その間学芸員の皆様は身を粉にして資料づくりに邁進され、さらには展示構想にも携わり、開館を迎えたとのこと。ちなみに現館長である平賀大蔵氏は、当時の学芸員の1人である。その後さらに、体験学習館とカフェテラスが建築され、現在の姿となっている。私立から市立への移行はあれど、現在も前出の東海水産科学協会が変わらず運営を続けている。

さて、本題の建物保存・利活用である。現地に向かう途中、数年前に訪れた時には、池が枯れていて残念だったことを思い出した。到着すると、十分では無いけど水がある。挨拶もそこそこにその事を尋ねると、昨日の雨で水が溜まっているが、徐々に抜けて空になるらしい。構造上水面を維持する事が難しく、水道代を考えると無理だそうで、市立になった時に改修の見積もしたが、見通しは立ってないらしい。改めて建築に目を向ける。外部は大きな保存修理はされていないが、最低限必要な修繕はされていて、竣工当時の姿を保っている。とはいえ外壁杉板のタール塗替えが必要か。外構や庭も同様で、営繕担当の職員がみえて、よく手入れされていると思う。ただし内部については、特に床のカーペット（一部水害のため張替え済み）の傷みが激しく、来館者に与える印象も踏まえ、張替えが急務であると言わざるを得ない。修繕費用については、ある一定の額までは指定管理者が負担し、それ以上の場合は市が負担する取り決めになっているようで、現状からは市にもう少し頑張っていたきたい、そのように感じた。ただし、私立運営の時代には赤字もあったそうだが、現在は指定管理費をうまく活用して収支を合わすことが可能であり、市への謝意を表されていた。また、市議会内でも予算を付けて適切

な維持管理を行うべきだとの声も上がり始めているそうだ。年間の全体予算は4,000万円程度であり、そこから人件費も捻出している。職員の内訳は現在、館長、事務局長、学芸員3名、経理1名、パート3名、アルバイト1名の計10名で運営している。修繕費には年によって差はあるが150万円程度割いているそうだ。現在の年間来館者数は約28,000～30,000人だが、施設の維持管理や収蔵品の保存管理、企画展の充実など、運営を円滑に行うためには50,000人必要で、広報の強化を検討中だそうで、そこで市の更なる協力が必要だと切望されていた。企画展については限られた予算の中で積極的に取り組んでおり、年3～4回開催している。学芸員を中心にアイデアを出して、聞いただけでも面白い企画がたくさんあり、さらに他の団体や国内外のアーティスト、三重大学や美術大学の学生などとのコラボレーションも数多い。さらに建築を見学に来る来館者も多く、そこも強みである。確かに広報がうまくできれば、来館者数は直ぐにでも増加しそうなポテンシャルを持っている。取材の中で印象的な言葉があった。「もっと自慢してほしいんです」鳥羽市民にとって誇るべき博物館なのだから、それぞれが自信を持って紹介してほしい、それが博物館を活かす続ける事にきっと繋がる、そういうメッセージである。

前段で沿革に多くの紙面を費やしたが、それは博物館の創設、運営に関わる人々の「思いの強さ」を知って欲しかったからである。取材を通じて、保存・利活用を成功に導くのは「思いの強さ」であることを学んだ。運営に直接関わる人だけでなく、鳥羽市民だけでなく、我々全員が当事者意識を持ち「自慢する」ことが必要なのである。

今回の執筆にあたり、長時間に及ぶ取材に応えてくれた事務局長であり前石原館長のご息女である石原真伊氏に改めて感謝を申し上げるとともに、我々に「海の博物館」を残してくれた故石原義剛氏に敬意を表したいと思います。





賓日館

高瀬 元秀

所在地 伊勢市二見町茶屋 566-2

建物概要 木造 2階建 1887 年竣工

伊勢神宮のお膝元、夫婦岩のほど近く、松林が美しい二見浦に面して建つのが賓日館である。

明治からはじまり昭和に栄えた二見旅館街のシンボルとして多くの客人を迎えてきた賓日館だが、鉄道開通による人の流れの変化や、旅行形態の変化により、二見旅館街は衰退。賓日館も今は伊勢二見の歴史を伝える資料館となっている。

ここに至るまでの過程を紐解くには伊勢神宮とともに栄えてきた二見の歴史と照らし合わせて見ていくのがわかりよいだろう。

1887年(明治20年)

伊勢神宮に参拝する賓客の休憩・宿泊施設として、神宮の崇敬団体である財団法人神苑会により建築される。

賓日館という名前は、神苑会総裁であった有栖川宮熾仁親王が「賓客の泊まる日の昇る館」という意味を込めて命名した。明治天皇の母にあたる英照皇太后のご宿泊に間に合わせるため、わずか2か月で完成させた突貫工事であったが、当時の技と贅を尽くして建築されており、建物の実質的な管理は隣接する旅館の二見館がおこなった。

1891年(明治24年)

後の大正天皇となる明宮嘉仁親王が3週間あまりご滞在される。

1911年(明治44年)

神苑会の解散とともに、管理をおこなってきた二見館に払い下げられ、二見館の別館となり、一般の人でも宿泊できるようになる。

明治末期～大正初期

1 回目の大規模増改築により、玄関棟と西棟が2階建てになる。

1930年(昭和5年)～

2 回目の大規模増改築により、2階の大広間が完成。現在の賓日館に近い間取りとなる。

1969年(昭和44年)

近鉄賢島線開通。賢島線は二見を通らないため、人の流れが大きく変化しだす。

1973年(昭和48年)

伊勢神宮御遷宮。二見旅館街宿泊客数のピークを迎える。だが、以降はゆるやかに減少していく。

1997年(平成9年)

国の登録有形文化財に登録される。

1999年(平成11年)

二見館の廃業にともない、宿泊施設としての役割を終える。

2000年(平成12年)

二見浦旅館組合や地域の人々が中心となって「二見浦・賓日館の保存と活用を考える会」が発足。一時は取り壊しの話も出たが、二年に及ぶ活動や交渉を経て、保存活用の道へと進む。

2003年(平成15年)

伊勢市(旧二見町)に寄贈され、資料館としてリニューアル。

2010年(平成22年)

国の重要文化財に指定される。

このように明治から現在まで紆余曲折のあった賓日館だが、明治・大正・昭和初期とその時々々の技と贅が混ざり合っており、建物の魅力は数多い。特に昭和5年からの2回目の大規模増改築でできた120畳の大広間は圧巻だ。折上格天井にシャンデリアが輝き、和洋を織り交ぜた空間が美しい。華やかだった時代を思わせてくれる。広間前方には能舞台もあり、背景には郷土の画家・中村左州の「老松」が描かれている。前方から横に目をやると廊下越しに外が見え、二見浦の景色が見られる。庭園の松と、二見浦の松林が重なり合い、緑に奥行きが感じられる。空の青とのコントラストもまた美しく、一見の価値ありだ。

その他にも、歴代諸皇族が宿泊されてきた華やかな意匠の「御殿の間」や、明治の創建当時の姿をとどめる「寿の間」、回遊式の庭園などなど、建築の見どころは枚挙にいとまがない。

こうして保存された建築美を羅列すると、うまく保存への道を進んだように思われるが、二見館廃業から資料館としてリニューアルオープンするまでの約4年間は手入れされることなく放置されていたため、屋根瓦がズレたり、雨漏りしたりする箇所もあったようだ。先ほど見どころにあげた大広間の折上格天井にも残念ながら雨漏りのシミがあった。手を入れ補修すればよいのにとと思われるところだが、重要文化財ゆえに勝手に直すわけにもいかず、建物の維持管理という点では難しいところがあるようだ。

リニューアルオープンした2003年より現在までは「二見浦・賓日館の保存と活用を考える会」が前身の「NPO 法人 二見浦・賓日館の会」により運営管理されており、2017年伊勢市の資料によると、年間来館者数は33,000人。年運営費は1,600万円となっている。

近年では賓日館のとなりの敷地、つまり二見館本館が建っていたところに、二見の銘菓の店舗と新工場が建設中で2024年春にオープンする。松林を見ながらお茶することができるカフェもあるそうで、観光客の立ち寄りも増えるだろう。賓日館との相乗効果が期待でき、今後は来館者数の増加も見込めるだろう。

相乗効果による盛り上がりだが、二見旅館街全体にいきわたることを期待するところだが、一つ懸念材料もある。賓日館の耐震工事・文化財保存修復工事が2026年から6年間行われることが決まっており、その間、賓日館の見学は難しくなってしまうのだ。

賓日館館長もせっかくのチャンスを逃しかねないと懸念しており、伊勢市に「工事見学ツアー」を提案しているそうだ。実際に重要文化財建造物の修復はこのように進められるのだと見てもらえたらと。こうしたことで忘れ去られる可能性を避け、少しでも収入につながるのではと考えておられる。

たしかに修復現場を見せる施設は多くある、奈良京都の社寺仏閣や首里城、熊本城の特別見学通路は感動すら覚えたのを記憶している。話は少し違うが、近年では熱海の復活なども話題になっている。それぞれ規模や条件は異なるだろうが、賓日館をきっかけに二見旅館街に活気が戻り、松林を多くの観光客が歩く景色を期待したいところだ。





文化財センター

文化財センターとはにわ館

旧カネボウ綿糸松阪工場綿糸倉庫

＜松阪市文化財センター＞

伊藤 達也

所在地 松阪市外五曲町1番地

建物概要 レンガ造(一部木造)平屋建 面積1,044㎡(渡廊下含) 1923年竣工

赤レンガ倉庫は、1993年までの70年に渡り、綿糸原綿倉庫として使われ続けた。江戸時代に遡るが、当地出身の豪商、三井高利が起こした越後屋、後の三井財閥が、明治20年(1887)鐘淵に紡績工場を創業した(現在のカネボウ)。その後、紡績の盛んだった三井家発祥の地の松阪に、大正時代にカネボウ綿糸松阪工場として創業した。市有地となる際には更地となる予定であったが、近代化遺産として歴史的価値の高かったレンガ造(イギリス積)の倉庫は、保存気運の高まりもあって、3部屋の市民ギャラリーと文化財の収蔵庫として、1996年に鉄骨造平屋建の事務所棟(327.37㎡)を棟別増築し、松阪市文化財センターとしてオープンした。現在も、埋蔵文化財包蔵地届出書の提出先窓口で、年に何度か足を運ぶ行政窓口である。



イギリス積みレンガの壁

大正12年(1923)竣工直後には、関東大震災が発生している。計画段階ならば、レンガ造で建てられたかどうか?また、平成7年(1995)の阪神淡路大震災の後に市有地になったならば、保存活用に至ったか。赤レンガ倉庫は、うまく時代を潜り抜け生き残った証しとして、平成14年(2002)には、登録有形文化財となった。

平成15年(2003)には敷地内の坂内川沿いに、渡り廊下でつないだ鉄筋コンクリート造平屋建の、はにわ館(建築費約4.0億円)がオープンした。令和に入り、鈴の森公園を囲むように、同じく収蔵庫(建築費約6.6億円超)が完成した。この2棟は意匠を合せ、赤レンガを彷彿させるタイル張りで、寄り添うように歴史的な景観に厚みを加えているように感じられる。結局の所、国宝級の文化財の展示収蔵には、設置基準を満たす必要があり、赤レンガ倉庫では、耐震性能、耐久性の面でお墨付きがもらえなかったという事になるが、赤レンガ倉庫自体が登録有形文化財として、その存在価値を更に高める結果になったと感じている。



はにわ館



左から収蔵庫・はにわ館・赤レンガ倉庫



収蔵庫とピオトープ

独立までの6年半勤務していた設計事務所が、当時1993年頃に、この赤レンガ倉庫の改修設計監理を行っていた。残された設計資料には、割れたレンガ造壁の、注入工法での修復実例や、無筋レンガ造の、74mの桁行に、内部からピンポイントで、RC造の補強壁が設けられた構造図等は実に見応えがあった。中でも、小屋組の木製トラスは、一旦解体し洗浄し、腐食の著しい部分は取換え、金物は制作し直す作業経過は圧巻で、(ゼネコン泣かせ的になるが)当時の営繕課長と社長の(今となってはお二方とも早々と鬼籍に入られている)情熱の詰まった貴重な参考書であり、財産そのものを、何度も見漁った記憶が甦る。

平成30年度版の松阪市公共建築物施設カルテによると、土地建物の取得費用は約2億5千万円。設置目的は、「宝塚古墳出土資料など、歴史的文化遗产の保存と芸術文化の振興を図るため、文化財センターを設置する。」と記載があります。年間入館者数は、50,501人、隣接するはにわ館、図書館、文化会館等、文教施設や、鈴の森公園との相乗効果もあり、市民ギャラリーの年間稼働率は70%前後で推移している人気の施設なのです。個人的には「郷土の偉人展」の大ファンである事を添えておきたい。管理運営面では、使用料等の収入が約153万円あるものの、年間7,300万円前後の支出、その約7割が人件費であることが記載され、市民一人当たりのコストは約437円となっている。

赤レンガ倉庫が竣工して、ちょうど100年が経過した。コロナ禍で順延した、みえ松阪マラソンが、令和4年(2022)、ようやく開催の時を迎えた。施設全体を通称「は

にわ館」と表した赤レンガ倉庫は、みえ松阪マラソンのスタート地点となった。三重県初の42.195kmの公認コースである。商家のうだつを彷彿させる防火壁を横目に見ながら走り出す。これから新しい歴史を積み重ねていく事となる。

そして、この春、令和6年(2024)3月15日、国の文化審議会において、出土時点から国宝級と言われ続けた、代表的な船形埴輪、「宝塚一号埴輪出土埴輪・278点」について国宝に指定するよう盛山正仁文科大臣に答申がなされた。事実上、松阪市初の国宝である。国の宝の展示保管場所にある市民ギャラリーとして、赤レンガ倉庫も更なる歴史を積み重ねていく事となった。様々な歴史と人々が繋がっていく松阪のパワースポットである事は間違いない。この際、ついでに一言、「図書館も赤レンガタイルで改修してほしい。」船形埴輪と赤レンガ模様のパワーが宿る図書館として、次の改修で是非とも、未来に託したい思いを強く感じずにはられない。



渡り廊下



七里の渡し (左) と旧東海道 (右)



六華苑洋館



桜堤防と揖斐川：背後は伊勢大橋



諸戸氏庭園と運河



住吉浦：住吉神社と背後は多度山

旧諸戸清六邸 <六華苑>

奥野 美樹

所在地 桑名市大字桑名 663-5

建物概要 木造 延床面積：洋館（2階建＋4階塔屋付）441.94㎡ 1913年竣工（洋・和館とも）
和館（平屋＋一部2階建）368.13㎡

建物の紹介

ジョサイア・コンドルの設計によるこの丸い塔屋をもつ洋館は、2代目諸戸清六氏の結婚の新居として計画され、大正2年（1913）に竣工した。その後、清六氏は10年程度で生活を徳成に移し、用途も時代と共に変化した。戦後には進駐軍や桑名税務署、諸戸関連会社の事務所として使われ、平成2年（1990）に建物部分は桑名市に寄贈された。その後文化財の継承と活用のための整備事業が着手され改修工事を経て、平成5年に「六華苑」と名付けられて一般公開された。現在では、和館他の施設の利用のみならず、苑内でのコンサート、結婚式、映画の撮影など様々な催しが行われている。

これまでの経緯

公の所有となり、文化財としての調査や、構造的な補強、設備の改修も行われた。公開して永続的に利用していくには、メンテナンスを続けていくことは前提となる。これらの費用は、資料がなく想定によるが、建物は寄贈、その他は購入と思われ、整備事業では、報告書に工事費総額579,696千円（内建物436,489千円、残り庭園整備）と記載があった。

運営や維持管理は、公開後から平成17年度までは市直営（民間へ全委託）で、平成18年度から平成30年度までは六華苑と住吉浦休憩施設とを合わせて指定管理者によったが、令和元年度（2019）からは市直営（民間へ全委託）に戻った。平成30年度（2018）の六華苑公民連携導入調査には、

- ・市直営（民間委託）
歳入16,000千円、歳出45,000千円
- ・指定管理者制度
歳出27,460千円 ※収入は指定管理者とあり、いずれの方法による運営管理でも約27,000千円／年の支出が必要と報告されている。

以後、桑名市は管理運営に関するサウンディング型市場調査の実施、プロポーザルを経て、新たな民間事業者の募集を行った。

利活用の難点、メリット。今後の課題や目標

以前の指定管理者は令和元年度（2019）で解散した会社によった。会社に問題点があったのかは不明だが、収支差額を埋めるべく、新しい管理運営方法を模索した上で、新しい指定管理者を選定したのであろう。来訪者が年間約48,000人（平成29年度）で、入宛料が下記の表

であれば上記導入調査通り16,000千円程度の収入は見込めるが、施設利用料や飲食・物品の販売収入で残りの金額を賄うには、かなりの負担があることは想像できる。

一般的に、指定管理者制度の特徴は下記となる。目的としては、民間の活力を活用して、住民サービスの向上や経費等の削減を図ることである。民間目線の柔軟で自由な施設管理が可能となる。

- ・料金を自らの収入とできる。
 - ・自ら金額の設定が可能（行政の許可が必要）。
 - ・個々の使用許可を出すことができる。
- しかしながら、課題として
- ・収益性優先のために、人件費切り下げや第三者へ業務の一部委託によるサービスや専門性の低下。
 - ・指定管理は請負でなく行政処分であり、議員の兼業禁止規定には適用されない。また、業務委託に比べ契約期間が長くなり中長期的な視点で運営できる一方、首長の議会への報告や情報公開の義務化がなくなる（努力義務）ために、不正や癒着などへのチェックが難しくなる。
 - ・経営悪化の場合などの引継ぎ
新しい指定管理者は諸戸宗家に繋がり、その経営的基

入宛料

区分	個人	団体（20名以上）
一般（高校生以上）	460円	1人につき390円
中学生	150円	1人につき70円

小学生以下は付き添いを要します。

施設使用料 基本額

時間区分	基本額			
	午前 9:00~12:00	午後 13:00~17:00	全日 9:00~17:00	
使用区分	和館 一の間	6,200円	8,750円	12,510円
	和館 二の間	3,760円	4,980円	7,530円
	番蔵棟	9:00~17:00まで6,200円		
	会議室	2,440円	3,760円	4,980円
	旧高須御殿	1,820円	2,440円	3,760円
	芝生広場	6,200円	8,750円	12,510円
離れ屋	2,440円	3,760円	4,980円	

- ・冷暖房1時間あたり100円
- ・桑名市民以外の方が利用する場合は、基本額の2倍とします。

盤や人脈の広さは言うまでもない。様々なイベントが開かれるようになり、周辺環境では隣接する宗家由来の諸戸氏庭園が改修された。住吉浦も整備され、七里の渡し、旧東海道へのアクセスが良好となった。旅行者だけでなく、散歩やジョギングをする近隣住民の通行も多くみられる。従前に整備された施設・街区には一部劣化が見受けられるが、往来へテーマ性等を持たせて、街並みを意識したアップデートを行い点が面となれば、さらなる活性化が期待できる。また、揖斐川や運河となすこの景観が特徴であるので、かつて存在した揖斐川クルーズの復活や、ナガシマリゾートなどの事業との連携が実現すれば、魅力は増大すると想像する。

この官民連携は、桑名市の財政状況からはとても有効な方策であろう。さらに市職員への負担軽減にも好都合な方法でもある。今後は、コンセッションや民営化にも繋がっていくのかとも思うが、施設を維持していくには、地元の協力とそのコア的な人材育成が大切と考える。来訪者は収益となり大切だが、人やまちへの安全確保や衛生基準の維持、災害対策の観点からは、近隣住民と連携した環境づくりが必要であろう。

参考文献

- ・旧諸戸清六邸（六華苑）整備工事報告書 1995年3月 桑名市・桑名市教育委員会
- ・諸戸徳成邸調査報告書 2009年3月 桑名市教育委員会
- ・コンドルとその周辺展 1993年6月 桑名市博物館
- ・六華苑等公民連携導入調査 2018年度 内閣府
- ・六華苑等の管理・運営に関するサウンディング型市場調査実施要領 2019年1月
- ・公の施設の指定管理者制度の導入状況等に関する調査結果 総務省 2019年5月公表（2018年調査）
- ・観光レクリエーション入込客推計書 観光客実態調査報告書 2017、2019 三重県
- ・指定管理者が保有する行政関連文書と情報公開 三重大学法経論叢 2014年3月 前田定孝
- ・公共施設等運営権及び公共施設等運営事業に関するガイドライン内閣府
- ・コンセッション方式PFIの現状と課題 2015年5月 三井住友トラスト基礎研究所
- ・水道事業のコンセッション方式PFIをめぐる論点と考察
- ・桑名市民以外の方が利用する場合は、基本額の2倍とします。



中庭

旧山田郵便局電話分室

＜フレンチレストラン・ボンヴィヴァン他＞

高橋 徹

所在地 伊勢市本町 20-24

建物概要 レンガ造平屋建 面積 550㎡ 1923年 11月竣工

建物紹介・これまでの経緯

伊勢神宮外宮前にかつて神都伊勢の時代を今に伝える近代建築の一つ旧山田郵便局電話分室を保存活用した「フレンチレストラン・ボンヴィヴァン」は位置する。

明治維新後の伊勢神宮の国家神道化、政府の欧化思想の普及政策などとともに、伊勢市民（財団法人神苑会 明治19～明治42年）による神宮周辺の整備を核とした都市改造が行われてきた。賓日館（明治20年）、神宮徴古館（明治42年、片山東熊設計ルネサンス様式）などがある。また明治42年5月には外宮前に3つのドームを持つ欧風デザインの山田郵便局（重要文化財、明治村に保存）が完成された。（当時伊勢は明治38年伊勢―二見間に全国で7番目に神都線（市電）が開通している）このような背景のもと、通信省では明治末期から地方都市の局舎建築は木造が普通であったが、電話分室増築に当たって伊勢は神都ということで特別にレンガ造の洋風建築として建てられたと推測される。

設計はドイツ留学を終えた新進気鋭の吉田鉄郎で随所にドイツ風民家のデザインが採用されているとともに千鳥破風を思わせる和風の要素も見られる。建設中に関東大震災が発生し、構造的な補強が施されたという。コの字型の平面で構成され、レンガ造でありながらモルタルで被覆され鉄筋コンクリート風にみられる瀟洒な建物である。

煉瓦造電話局舎としては現存唯一のもので近代建築史・通信建築史の中でも重要な意味をもつ歴史的建造物である。（令和1年9月15日国登録有形文化財）

大正12年から昭和29年まで電話交換室として使用され、電話交換が自動化されるとその役割を終えた。その後、北側を電々公社伊勢健康管理所、昭和60年（1985）～平成5年（1993）まで伊勢市立郷土資料館と伊勢商工会議所の一部（2015年まで）として南側が使用された。平成9年（1997）より北側がフランス料理ボンヴィヴァンとして活用され、南側は2015年より神楽サロン有限公司がアートギャラリー・ダンテライオンチョコレートとして利用している。

保存への動き 伊勢市郷土資料館設置の経緯

伊勢市は昭和53年（1978）1月、日本電信電話公社・伊勢健康管理所を訪問し、建物が貴重な存在である旧山田郵便局電話事務室（当時建物管理・三重電気通信部建築課と会計課）を将来どのように保存していくのか交渉を始める。同年9月には伊勢市観光協会、伊勢郷土会など市民から伊勢市長宛に郷土資料館の設置の要望があり市議会で採択された。交渉の結果、昭和54年（1979）2月、東海電気通信局建築部では、「建物を公社で創設当時のものに復元して保存する。伊勢市に郷土資料館として貸与する。」方針が固まり、昭和58年度開設予定で修理、復元を公社で行うことになった。各紙の報道によれば、屋根・小屋組修復に着工（工費2900万円、再使用瓦8039枚、製造瓦15659枚）、年度内に整備終了。

その後、交渉は難航したが、市の粘り強い交渉により昭和60年（1985）9月1日、市立郷土資料館の開設を

迎えた。吉田鉄郎設計の貴重な旧山田郵便局電話事務室を保存継承するために資料館として活用してきたが、経費節減等により平成5年（1993）12月27日、約8年間の活用で閉鎖となり近くの旧図書館に移転した。

伊勢市当局の歴史的建造物保存活用へのアプローチが日本電信電話公社を動かし、改修工事を公社が行ったことが後々の活用に大きな力になったといえる。

フレンチレストラン・ボンヴィヴァン再生活用の経緯

伊勢の別の場所で本格的なフレンチレストランを営んでいた地元出身のオーナーシェフ河瀬毅氏は大正時代の由緒あるこの建物に長い間恋焦がれていた。いつかこの場所でレストランを開きたい。伊勢の人、伊勢を訪れた人たちと、この建物の中で過ごす喜びを共有したいという思いを持ち続けていた。平成5年（1993年・第61回式年遷宮）から空き家状態になっていたため、思い切って貸してほしいと願い出た。

活用の志をしたための企画書を持参し3度の交渉を重ね、伊勢市駅前の人通りは淋しい、この建物を再生させ外宮前の活性化の起爆剤にしたいと話したところ、当時のNTT伊勢志摩支店長は理解を示され、途中様々な問題が出てきたが最後は支店長の「貴方がやりなさい。あなたの考えるレストランがこの建物に一番ふさわしいと思うよ」の一言を境に大きく進展し平成9年3月に最終了解を得て開店に至ったという。（当時おはらい町の再生に刺激されて外宮前の活性化への取り組みが外宮賑わい会議など市民の間で起こり始めた時期で、NTT伊勢志摩支店長も参加していた。）また河瀬氏のご両親も電報電話局に勤めておられたこともあり、氏の思い実現のために交渉を支援されたという。

食の神様外宮の前にある歴史を感じさせる重厚な建築であり、かつ地元の人に長年愛されてきたこの美しい建物を自らがレストランという形で活用するにあたり管理運営者のNTTと協議を重ねて改修工事に取り組んだ。

そのコンセプトは「建てられた当時の姿を残すこと」に重点を置くことだったという。健康管理所として改造されていた部分を剥し当初の形を現し、ディテールを大切に保全し、かつての雰囲気を示す調度品至るまでこだわり、レストランとして活用する機能性については知恵を絞り、多少の不便は我慢するという姿勢で、設計者吉田鉄郎へのリスペクトを持って改修したという。最近では外観だけ保全し内部は全く違ったものになってしまう改修も見られるが、このような歴史的建造物へのリスペクトを持って活用してくれることによって本当の意味での歴史文化の継承がなされるのだと実感できる事例である。

当時、地区は公共下水道が未整備で飲食店の開業には大きなハードルである合併浄化槽の設置が必要であった。その解決を促したのがコの字型平面の中庭の存在であったことは言うまでもない。ある意味この建物が再生活用される運命を左右した事柄の一つであると筆者は考えている。周辺エリアは平成25年（2013）に催行された第62回式年遷宮に合わせて大きく変貌し賑わいを取り戻しているが、当建物は変わらずその瀟洒な姿で歴史の証人としてエリアに深みを与えている。

転用に掛かった費用

家主の負担

フレンチレストラン開設に伴う合併浄化槽（200人槽、現在は公共下水道）の整備などのインフラ整備 諸々の整備にかなりの額（2,000～3,000万円）を負担した（但し家賃への波及はせず）。開店以降もNTTの設計部局の担当者は吉田鉄郎初期作品への関心と理解があり、店の要望に耳を傾けフレンチの部屋の改修に当たり親身に対応してくれている。旧通信省の貴重な建物を活用してくれていることに感謝の気持ちを持たれている雰囲気を感じるという。平成25年の第62回式年遷宮の時は営業中にも関わらず外壁、屋根の美装化工事を行う等、継続して面倒を見ている。

運営者の負担

開設に当たっての厨房機器、調度品などを含めて整備費として3,000～4,000万円ほど費やした。

現状の運営状況（費用・収支の状況）

当初は身近なフレンチを提供するブラスリーとして15年ほど行い、奥に本格的なフレンチも提供する運営に転換しながら外宮前伊勢の食のシンボリック存在として親しまれてきた。さらに河瀬シェフはレストラン経営

だけでなく若い料理人を育成し、多くの洋食レストランが生まれている。伊勢を美食の街にという志のもと伊勢地域の食文化を牽引して来た功労者の一人である。

2023年9月10日に開設から40年になり、今年(2024年)からはシェフとマダムのお二人で新たな食の空間として歩き始めている。地産地消に100%こだわった料理と共に建物の魅力を愉しんでいただけるレストランとして継続されていく幸せな事例である。

現在北側はフレンチレストラン「ボンヴィヴァン」、南側は「神楽サロンが運営するクラフトチョコレート」「ダンデライオン・チョコレート 伊勢外宮前 うみやまあひだミュージゼ店」、東側中央部の「かぐらホール」はボンヴィヴァンが共同で運用し食事、コンサート、講座等に利用でき、建物全体が活用されている。神楽サロンは地域おこし協力隊の事務所としても使用され、複合的に人々が訪れる場所としても機能している。

飲食業、食材加工業は一次産業、環境と直接関わる業態で、地域食材を生かした職人、デザイナーである料理人と農林漁業者が連携することで地域経済の循環を可能にし、持続的な地域活性化が図られる。食の神様外宮前にあることから特にそのことに留意してレストランを運営し発信している拠点としても機能している。

レストラン内部



利活用の難点、メリット。今後の課題や目標

活用の先駆者であるボンヴィヴァン(河瀬毅シェフ)は単にその建物を機能的に改修するのではなく、その建物の価値、物語性を守り、その心を引き継ぎ、活用しようとしたものであり、利活用の難点をプラスにできるように知恵を出しながら最大限建築の価値を生かして活用運営している。この思想は歴史的建造物を活用するとき学ぶべき視点である。

古民家や近代建築はその地域における貴重な地域資源である。活用するにあたっては建物が持つ物語をはじめ、経過した絶対的時間経過はなにもものにも代えがたいものであり、新築するよりも保存活用することの方が歴史文化を継承した地域まちづくりに貢献することが容易で、開発のリスクも少ないといえる。

歴史的建造物が再生活用され、輝きを増したことでその価値に多くの人が気づき、さらに登録有形文化財として国に認定されたことにより所有者個人のものだけでなく地域の宝物としても認識されていくことの積み重ねが、地域の歴史文化を育み暮らしそのものが町の魅力となるのである。

建物所有者であるNTT西日本は、「今後とも旧山田郵便局電話分室の適切な保存及び維持管理を行うとともに、国の登録有形文化財(建造物)の推進に寄与していきます。」と発言している。NTTとしても旧通信省時代の建築物としても唯一残る貴重な局舎である。今後も守られていくことであろう。

今後、使われ続ける建物として本質的価値を理解してもらえるようにしていくことが課題といえる。神都伊勢を標榜した時代の記憶装置としてとらえ地域の宝として所有者、市民行政が一体となって近代建築をリビングハリテージとして位置付けていくことが求められている。

ボンヴィヴァンは単にその建物を利用するのではなく、その建物を取りまくすべてを守り、その魂そのものを活用した事例といえる。建築に潜在する魅力や価値を再発見し、地域の豊かさを再構築し、観光客に対してだけでなく、地域住民の暮らしの中に近代建築を生きた資源として輝かせた。

参考文献

- 人生を愉しむレストラン 2012 河瀬 毅著
- Renovation Archives [105] 取材担当 = 川畑 華子(三重大学)
- 伊勢郷土会 443 回月例講座資料 2011(平成 23 年) 阿形 次基 写真提供 月兎舎

人口減少・低炭素化などに対応すべく、国は2013年に「インフラ長寿命化基本計画」を策定、2014年4月に各自治体に「公共施設等総合管理計画」の策定を指示した。それにより公共建築の利活用への取り組みはより促進する状況と思われます。

現状実施された事例では、文化的価値の継承とともに省エネ・ユニバーサルデザイン対応が必須の事項となっています。歴史的建築の活用が多い中、富山県の体育館を庁舎に転用した例は、あるものを無駄なく使う好例で、建築技術・アイデアを盛り込んで現状のニーズに対応し、多くの賞を受賞した注目物件です。

また、耐震性の不足はすべてに見られますが、コンクリートの中性化は進行しておらず、改修において中性化進行防止措置がとられています。

建物名	竣工年 / 改修完了	改修内容	再利用検討までの年月	検討から改修竣工までの期間	改修面積 構造・規模	改修費用	工事単価	建替費用 設計・解体含 (参考試算)
旧千代田生命 本社 設計:村野藤吾 →目黒区総合庁舎 改修:安井建築設計	1966年 / 2003年	事務所→区役所/広場・池・緑、優美な外観など文化的価値を維持 区役所としての窓口の設置 安全対策、手摺などバリアフリー・ユニバーサル化 耐震補強/屋上・外壁既存/サッシ既存 内部仕上部分補修/家具既存 空調設備既存・電気設備既存・給排水設備一部改修	35年	2年	48,057㎡ R C造 地上9階 地下3階	6,206,234 千円	120千円/㎡	18,022,000 千円
旧有磯県立高校 体育館・校舎棟 →富山県水見市庁舎 改修:山下設計・浅地設計	1966年 / 2014年	体育館→市庁舎 非活用既存施設の有効利用 体育館の気積を低減する天井の設置(省エネ改修) 耐震補強(校舎棟) 屋上・外壁既存/サッシ既存/内部仕上改修/家具既存 空調設備更新・電気設備更新・給排水設備更新	46年	2年	7,890㎡ R C造 地上2階 地上3階	1,625,765 千円	206千円/㎡	2,957,000 千円
旧北九州市戸畑区役所 →北九州市立図書館 改修:青木茂建築工房	1933年 / 2014年	区役所→図書館 帯冠様式の建物、地域のシンボルの維持 耐震アーチフレーム設置など意匠を配慮 耐震補強 屋上・外壁復元改修/サッシ更新/内部仕上更新/家具更新 空調設備更新・電気設備更新・給排水設備更新	77年	4年	2,889㎡ R C造 地上3階 地下1階	798,633 千円	276千円/㎡	1,263,000 千円
旧新宿区立 四谷第五小学校 →吉本興業東京本部	1934年 / 2015年	小学校→事務所 インターナショナルスタイルの外観保存 空調・電気配線・照明・給排水設備及び内装の補修 耐震補強 屋上・外壁既存/サッシ既存/内部仕上一部補修/家具更新 空調設備更新・電気設備更新・給排水設備更新	72年	1年	5,500㎡ R C造 地上3階 地下1階	1,100,000 千円 (設計監理含まず)	200千円/㎡	1,993,000 千円
旧東洋紡績呉羽工場 →富山市民芸術創造センター 改修:サンコーコンサルタント	1929年 / 2015年	工場→芸術支援施設 工場のがざり屋根形状を維持 鉄骨躯体のみを除き、ほかすべてを新設 基礎・スラブ・鉄骨躯体既存 屋根・外壁新設/サッシ新設/内部仕上新設 空調設備新設・電気設備新設・給排水設備新設	61年	4年	7,984㎡ 鉄骨造 地上1階	2,702,000 千円	338千円/㎡	3,763,000 千円

以下 所有者・用途などに変更のない事例

青森県弘前市民会館 設計:前川國男 →改修:前川建築設計	1964年 / 2013年	ホール/外壁・建具の劣化防止/オリジナルデザインの復元 舞台機構の改修。トイレ改修、託児室親子室の新設 LED照明・太陽光発電・空調設備などの省エネ化 耐震補強 / 煙突再構築 屋上・外壁復元改修 / サッシ既存 / 内部復元改修 / 家具既存 空調設備改修・電気設備改修・給排水設備改修	44年	4年	5,594㎡ R C造 地上2階 地下1階	2,732,432 千円	486千円/㎡	4,086,000 千円
青森県弘前市庁舎 設計:前川國男 →改修:前川建築設計	1958年 / 2015年	市庁舎 「弘前市歴史的風致維持向上計画」 歴史的建築資産として保全・活用 耐震補強 / 屋上・外壁復元改修 / サッシ内窓追加 内部仕上復元改修 / 家具更新 空調設備更新・電気設備更新・給排水設備改修	50年	7年	11,283㎡ R C造 地上6階 地下1階	2,590,000 千円	230千円/㎡	4,229,000 千円
香川県庁舎 東館 設計:丹下健三 →改修:松田平田設計	1958年 / 2019年	県庁舎/日本の戦後モダニズム建築を象徴する建物の維持 維持管理の容易な免震層の構築 庁舎機能の保持。市民サービスを継続しながらの施工 免震改修 / 屋上・外壁補修・手摺復元改修 / サッシ内窓追加 内部仕上既存補修(一部耐震化改修) / 家具既存 空調設備改修・電気設備改修・給排水設備改修	55年	6年	11,871㎡ R C造 地上9階	4,200,000 千円	354千円/㎡	7,500,000 千円
青森県庁舎 基本設計:谷口吉郎 実施設計:日建設計 →改修:日建設計	1960年 / 2019年	県庁舎(業務・議場) 8階建てを6階建てに減築(効率的な耐震改修のため) 天井の撤去(省エネ効果・OA化対応) 特定天井の廃止(エントランス・議場) 耐震補強(減築) / 屋上・外壁大規模改修 / サッシ更新 内部仕上一部改修 / 家具既存 空調設備更新・電気設備更新・給排水設備更新	51年	4年	24,758㎡ R C造 地上6階 地下1階	8,236,000 千円	333千円/㎡	9,281,000 千円 (+移転仮使用費 87億円)

建替コストは「平成31年度 建物ライフサイクルコスト 国交省大臣官房庁営繕部監修」に掲載の単価による(設計監理・解体を含む)

参考資料・引用

- 香川県 HP・香川県庁舎東館耐震化工法について 香川県総務部
- 目黒区 HP・目黒区総合庁舎 村野藤吾の建築意匠 目黒区総務部
- 公共建物の長寿命化施策の事例調査ならびにVFMの基礎研究 天神 良久著

「建築というきっかけ」

●開催日:2023年 2月4日 ●講師:永山祐子

2月4日、津市のアストホールに永山祐子氏をお迎えして建築文化講演会が開催された。講演は、最近作の写真を順に紹介しながら解説するという形で進められた。私は永山氏の作品についてあまり知識がなく初めて見る作品ばかりなので新鮮な気持ちで拝見した。

最初に『2020年ドバイ万博日本館』。白い立体トラスに三角形の幕が張られたファサードが映し出された。麻の葉文様の組子障子にヒントを得たというトラスと幕によって造形されたファサードがパビリオンを覆い来館者を迎える。

続いて東京都心に建つ超高層ビルの外装デザイン2件。『東急歌舞伎町タワー』では、高層ビルにありがちな単なるガラスの箱ではなく、しなやかで柔らかい噴水をイメージした。ガラスに特殊印刷を施し、その模様や角度を工夫することで水のキラキラした反射や白いしぶきを表現している。

2027年に完成予定の『トーチタワー』では、超高層ビル低層部の外装デザインを担当。周囲の街や広場とは無関係になりがちな超高層ビルの足元に空中散歩道を巻きつけることで都市と繋がる新しい体験をつくり出している。

これら3件に共通することは、いずれも設計の主眼が外観デザインにあることで、それぞれ外装の素材やディテール、スケールなどがモックアップ等で慎重に吟味され、光の反

射や透過による映像的効果などきめ細かな設計がなされている。ただ、建物の表層だけのデザインは、(パビリオンや商業ビルという用途上やむを得ないと思うが)舞台装置の書割のようで、写真やパースからはその建築的魅力が伝わってこなかった。

続いて前橋市の郊外型店舗『JINS PARK』。地域貢献型の眼鏡店にしたいという建築主の要望から、駐車場を建物の裏側にして前面道路側に広い庭をつくることで、地域のイベント等ができる広場を提案した。内部は、エントランスから大階段を介して青空が一望できる。大階段先の屋上テラスは小さい子供連れの母親が訪れた時に安心して子供を遊ばすことができる広場になる。「母親がリラックスできる場所があれば地域全体が幸せになれる」という女性建築家ならではの視点で提案されている。建築のプログラムやプランニング、周囲の街との関係、内部の空間構成が総合的に設計された永山氏の力量と細部にわたる気配りが十分伝わってくる素晴らしい建築である。

2014年にJIA新人賞を受賞された『豊島横尾館』は、古民家をリノベーションした横尾忠則氏の美術館。玄関の赤ガラスが美術館のテーマである「生と死」「日常と非日常」の結界を表現している。また、色彩情報を消す赤ガラスによって3次元の建築を絵画的な2次元表現に近づけることで建築と絵画が一体とな



長坂 常「半建築」～「半建築」って何? 「長坂常」ってどんな人?～

●講演者:長坂 常 氏 ●開催日:2024年 1月 27日 ●会場:アスト津/アストホール

講演のレポートを依頼されたものの、なかなかうまく筆が進まない。ひとまず「半建築」の書籍を拝読し、ひと通り再確認したところであらためて原稿に向かうものの、なかなか表現が難しい。締切りが迫って焦りつつも落ち着いて考えてみると、それこそが「半建築」というキーワードであり、「長坂常」というクリエイターの世界観のような気がしています。

“建築と家具の間”というのが当初の「半建築」の意味とのことですが、「半分完成、つまり未完成」と捉えられることも、言葉の響きから「反建築」というニュアンスで感覚的に捉えられることも、それはそれで受け入れる寛容さ。

のめり込んだレゲエの場づくりから、家具・内装を経て建築やまちづくりへとつながるシームレスな活動領域。

国内外の大小様々なプロジェクトごとに繰り広げられるストーリーは、「長坂常」という一個人からの複眼的思考から、その場が新たな息吹を吹き込まれていく様です。

「見えない開発」の話の際、“いらないよね→変えなくていいよね”というくだりは、“つくる”ことだけを考えて、“つくらない”ことを考えない時代のことを思い出していました。バブル期に学生時代を過ごした私にとって、過剰につくられていく饒舌な、もしくは



講演の様子



▲会場の様子



▲長坂常氏

は空疎な建築群に対しては、辟易とした思いを抱かずにはいられませんでした。その頃からは社会情勢も変わり、建築界も様々な変遷を経たいま、依頼するクライアントと長坂氏とのやり取りを聞くと、ようやく生

活者の視点に戻って交わされている理想的な姿のように感じられました。

「JIA三重 建築文化講演会」は、1988年に始まり、今回で第37回目を迎えました。当日の来場者には過去の講師一覧が配布されましたが、その顔触れは、それぞれの時代としての視点と、地方都市での生活者としての視点が同時に反映された選定となっているようにも感じられます。こうした場が、地域内外の建築関係者や将来を担う学生達にとって、有意義な場であって欲しいと思います。

(久安 典之)



▲長坂常氏 著書



▲文化講演会2024 リーフレット

(村林 桂)

日本建築家協会（JIA）三重会員名簿

氏名	所属先	TEL	FAX	住所
幹事				
森本 雅史	㈱森本建築事務所	0595-65-2638	0595-66-2639	518-0623 名張市桔梗が丘3番町2街区68-4
出口 基樹	日新設計㈱	059-227-7421	059-225-7854	514-0038 津市西古河町20番18号
山本 覚康	山本一級建築士事務所	059-225-0757	059-224-1779	514-0815 津市藤方1457-4
西出 章	㈱森永建築設計事務所	0595-21-1125	0595-23-9945	518-0873 伊賀市上野丸之内62-2

川崎 貴覚	川崎建築設計室	059-377-2134	059-377-2092	510-8101 三重郡朝日町繩生663
奥野 美樹	㈲奥野建築事務所	052-963-0771	052-963-0772	511-0009 桑名市桑名663-17
阪 竹 男	㈲阪竹男建築研究所	059-322-5096	059-322-6097	510-0961 四日市市波木町394-1
中村 久	㈱中村建築設計事務所	0594-76-2102	0594-76-8717	511-0257 員弁郡東員町北大社1325-9
久安 典之	久安典之建築研究所	059-359-6678	059-359-6679	510-0086 四日市市諏訪栄町22-3

松本 正博	㈱上野建築研究所	0595-23-6272	0595-23-6273	518-0801 伊賀市平野見能330-22
池澤 邦仁	池澤アソシエイツ	0595-36-2429	0595-36-2429	518-0813 伊賀市蓮池410
滝井 利彰	一級建築士事務所タック設計室	0595-23-5092	0595-23-0322	518-0858 伊賀市上野紺屋町3171
中森 博文	まちづくり研究所	0595-65-3401	0595-65-0298	518-0603 名張市西原町2685-1
森本 昭博	㈱森本建築事務所	0595-65-2638	0595-66-2639	518-0623 名張市桔梗が丘3番町2街区68-4

村山 邦夫	㈱アーキ設計	059-225-7020	059-225-5104	514-0041 津市八町3-10-10
相原 宏康	Hiro 設計室	0595-96-8175	0595-96-8175	519-0118 亀山市北町8-28-6
木下 誠一	三重短期大学生活科学科 教授	059-232-4430	059-232-9647	514-0112 津市一身田中野157
富岡 義人	三重大学工学部教授	059-231-9662	059-231-9452	514-8507 津市栗真町屋町1577
平野 信義	アーツ設計	059-227-1405	059-227-1407	514-0007 津市大谷町194-8-1 B
山下 和哉	㈱建築デザイン研究所	059-253-6200	059-253-6201	514-0007 津市大谷町254 エンデパービル4F

伊藤 達也	一級建築士事務所設計工房 NEXT	0598-30-5546	0598-30-5546	515-2324 松阪市嬉野町1487-15 シティハイムフォレスト101号
高瀬 元秀	タカセモトヒデ建築設計	0596-64-8635	0596-64-8635	519-0501 伊勢市小俣町明野1708
高橋 徹	㈲高橋徹都市建築設計工房	0596-27-0455	0596-23-6645	516-0009 伊勢市河崎2丁目27-34
谷川 精一	㈱アスカ総合設計	0598-58-3260	0598-58-3264	515-0845 松阪市伊勢寺町590-4
芳賀 信次	H A G A 総合設計	0598-21-5511	0598-21-5512	515-0064 松阪市五反田町3-1130-8

準会員（ジュニア会員）				
米田 雅樹	一級建築士事務所 ヨネタ設計舎	0596-67-7327	0596-67-6494	515-0311 多気郡明和町平尾306-3
多湖 弘樹	日新設計㈱	059-227-7421	059-225-7854	514-0038 津市西古河町20番18号
伊藤 大智	日新設計㈱	059-227-7421	059-225-7854	514-0038 津市西古河町20番18号

個人協力会員				
服部 昌也	株式会社 八武組	059-331-3030	059-331-3856	510-0815 四日市市野田1丁目2-44

日本建築家協会（JIA）三重法人協力会員名簿

法人協力会員 会社名	TEL	FAX	住所
株式会社 LIXIL	059-238-5017	059-238-5033	514-0816 三重県津市高茶屋小森上野町1109-1
三見金属工業株式会社	059-245-6456	059-245-6460	510-0308 三重県津市河芸町中瀬232-1
株式会社タフ	052-408-2258	052-401-1778	452-0962 愛知県清須市春日江先18
オスモ&エーデル株式会社	052-253-9221	052-253-9226	460-0002 愛知県名古屋市中区丸の内3丁目20-9 三見社ビル4F
コイズミ照明株式会社	059-380-3711	059-388-3511	510-0226 三重県鈴鹿市岸岡町3747
有限会社伊勢地祺	0596-38-1688	0596-38-1588	515-0504 三重県伊勢市磯町1252
TOTO 株式会社	052-308-4705	052-308-5646	514-1113 三重県津市久居野村町420-10
アイカテック建材株式会社	052-757-5177	052-757-5192	464-0821 愛知県名古屋市中千種区末盛通2丁目1番地1
株式会社アイチ金属	052-909-5600	052-909-5610	462-0011 愛知県名古屋市中北区五反田町77番地
株式会社東海ベース	052-485-6205	052-485-6206	454-0983 愛知県名古屋市中川区東春田1丁目29番
総合資格学院四日市校	059-359-0711	059-359-0712	510-0075 三重県四日市市安島1-2-24 TKビル4F
株式会社ミヤムラ	059-245-1515	059-245-1735	510-0303 三重県津市河芸町東千里1019-2
YKK AP 株式会社中部支社 名古屋ビル建材支店	059-224-1521	059-226-0953	514-0004 三重県津市栄町1-840 グランスクエア津3階
㈱建築資料研究社 三重支店 / 日建学院 津校	059-291-6030	059-291-6033	514-0034 三重県津市南丸之内8-61
チャンネルオリジナル株式会社 名古屋営業所	052-990-6092	052-990-6182	461-0004 愛知県名古屋市中東区東桜1丁目10-9 栄プラザビル7階
株式会社エヌ・エス・ピー 住宅事業部中部営業所	0568-73-3003	0568-73-8177	485-0082 愛知県小牧市大字村中宇池田1074-1



表紙は記事になっている海の博物館の収蔵庫棟です。使われなくなった本物の船が収蔵されています。使い込んだ船の大きさ・材質感の迫力と建物架構であるプレキャストコンクリートがそのまま見える力強さが対峙して、ほかでは見られない相乗効果のある空間となっています。著名建築家の建物が少ない三重県下で唯一、建築の最高賞といえる日本建築学会賞を受賞した貴重な建物です。この建物を見るために遠方から三重を訪れた方も多かったと思います。しばらくして博物館が閉鎖になるような話が出たときは、貴重な存在がなくなってしまうかと心配しましたが鳥羽市に移管されることになって本当に良かったと思います。市の所有となって地元との連携はよりやり易くなったのではないのでしょうか。今年4月から6月にかけて三重大学主催の「鳥羽の海小屋」の展示・講演会が催されます。三重への観光で伊勢神宮まで来ても、鳥羽・志摩まで足を伸ばす方は少ないと感じています。伊勢神宮ともに志摩の自然・文化をぜひ見て感じてほしいと思います

編集後記

2020年以降コロナ禍のため、対面でのイベントが控えられていましたが、昨年2023年5月に新型コロナが5類扱いとなり、ようやく公的にコロナ禍終了ということで、以前のイベント活動が再開しました。リモート利用のメリットを継続しつつも、実際に対面する楽しさをより強く感じるようになりました。以前以上に対面の事業が活発となっていくのではないのでしょうか。

今回の特集記事は建物の保存・利活用としました。前回の空き家問題に引き続き、地域の人々に直接関わってくる問題です。人口減少・低炭素社会に向けた建物の長寿命化への国の施策や建築文化の継承のため、建物利活用の検討が増えるなかでも、近代建築の取り壊しは進んでいます。東海地区でも昨年末、旧羽鳥市庁舎（1959年竣工・設計：羽鳥市出身の坂倉準三）の解体予算が議会承認を得て、今年度解体が始められることになっています。一方三重では同じ坂倉設計の旧上野庁舎の利活用への準備が始まっています。そんな解体是非の判断の目安づくりに役立たないかと三重県下の事例をまとめることとしました。

取材した会員（今回の執筆者）から伝わってくるのは、保存・利活用を熱い情熱をもって推し進める個人の存在です。利活用の経緯を書くためには、この人に聞きに行けばよいという方がそれぞれにいらっしゃるようでした。最終的には関係する人の総意ということで決まるのですが、そこに人々を引っ張っていく情熱をもった人物の存在が不可欠のようです。

また、利活用に掛かる費用は、新築する場合よりは、かなり安くなるものの、絶対金額としてはかなりの高額になっています。国や県の施設などでは、費用の捻出がしやすいと思えますが、地方の小さな市町村にとっては、その負担は過大と言えそうです。近代建築を継承していくためには、当該市民だけにその存続の判断、費用負担を委ねるのではなく、日本全体の問題として広く考え、補助していくことが必要と思えます。

今回まとめたこの冊子が、各地の建物保存の参考資料として多少なりとも役立つことを僥越ながら期待しています。また、三重の利活用建物の魅力を感じていただければ幸いです。

服部昌也（広報委員長）

アーキテクトみえ 34・35号

発行日 2024年3月31日
発行責任者 森本 雅史
編集責任者 服部 昌也
編集集 三重地域会広報委員会
発行者 公益社団法人日本建築家協会 東海支部三重地域会
〒514-0038 津市西古河町20番18号
TEL：059-227-7421

●表紙題字／石川紫水（書家・愛知県知多市）

WHO?

「建築家って、何をする人?」と
 あらためて聞かれると、その職業名はしていても実際にどんな仕事をするのかは、意外にご存知ないもの。
 「設計図を描く人」「大工さんに指示する人」など
 部分的なイメージを持っていても本当の姿はなかなか伝わっていないようです。
 「えっ、こんなことまでしてくれるの?」と驚かれるほど、さまざまなことをする建築家について
 新しい目を向けてください。

建築家は
建物の
お医者さんです



建築家は
建物の
財務マンです



建築家は
建物の
法律コンサルタントです



建築家は
建物の
演出家です



建築家は
建物づくりの
キャプテンです



建築家は
環境価値の
創造者です



建築家は
一生の
パートナーです



JIAは
そんな建築家の
組織です



6月15日は建築の日



公益社団法人日本建築家協会東海支部
 三重地域会

<http://www.jia-mie.com>

